

次の日の昼休み、私は教室の窓枠によりかかって、外を眺めていた。

狭い校庭、住宅地、そして曇った空が見える。

窓から外を見ると、私はいつも少しほっとする。世界が、私は無関係に、しっかり動いているのが見えるので。私が泣いても苦しんでも死んでも、世界にはほとんど関係ない、と感<sup>2</sup>じることができ<sup>6</sup>る。

「なにか見える？」

知らない声だった。

横を向くと、知らない顔が私を見ていた。

「核戦争前の世界が見える」

彼女は、どう返事していいのかわからない、という様子だった。やがて気を取りなおしたのか、

「…清良の影響？」

「知りあい？」

「まあね」

その声の響きは、暗に『あんなの嫌いだけど』と言っていた。

「なんの用」

「このごろ、清良と目立つことしてるじゃない。あれ何？」

「さあ。」

少なくとも、核戦争を起こす準備じゃないと思う」

「ふーん」

言って、彼女は黙り、窓の外に目をやった。

彼女は小さな声で言った、

「バーカ」

お互いに相手の表情を確かめようとして、目が合った。彼女は、少しいじけたような目をしていた。

彼女は顔をそむけ、窓際を離れた。<sup>2</sup><sub>6</sub>

そのあとしばらくして、清良が現れた。

「はあい。調子はどう？」

変な挨拶だと思った。けれど、もしかすると清良の言語感覚にとつては当たり前前の挨拶なのかもしれない。

「…普通」

清良は窓ガラスに背中をあずけ、窓枠に肘を乗せた。端正な顔のためもあって、その姿は映画のシーンのように絵になっている。

「気が変わったって顔じゃないわね」

「ええ」

「これから変わる予定はない？」

「ええ、ない」

「こんなことがあつたら変わってもいい、ってことはある？」

「いいえ」

「……このあいだは、おためごかしだなんて決めつけたけど」

言いながら清良は首の後ろに手をやった。

「あなたの話を聞いたほうがいいのかしらね？ どうして言いたくないんだか、そのわけのこと。」

わけを聞いてあげたら、気が変わる？」

「いいえ。」

でも、聞いてほしい」

清良は悲しみながら笑っているような奇妙な表情を見せ、私の肩をつかんで引き寄せた。

「嘘でもいいから気が変わるって言ったら聞いたげるのに、ほんと可愛いよね。」

ね、嘘ついてみない？ 言い逃れなんていくらでもできるじゃない。『やっぱり気が変わった』とか。あ、この場合は『変わらなかった』？ どっちでもいいけど」

「嘘はつかない」

「……」

私の肩から手を離し、少し押しやるようにしてから、清良はまた窓枠に肘を乗せた。

「手強い」

「…あなたはいつも友達にこんな風に接してるの？」

さっきの知らない人のことが、気持ちの隅に引っかかっていた。

「まさか。あなたは特別。だいたい友達じゃないし。」

友達になりたい、なんて言わないでよ？ 気持ち悪い」

「そう」

「…なにか言いたかったんじゃないの？」  
「言われたいの？」

清良は、ふう、と深いため息をついた。

「あなた、あたしになにか求めてる？」

「ええ」

「やめてよ。気持ち悪い」

「わかってる」

すると清良は私から目をそらし、黙りこんだ。なにか考えこんでいる、という様子だった。

「…泣いてみせて」

「え？」

「今すぐここで泣いてみせて」

考えこんでいるような様子のまま、斜め下に向けた視線も動かさずに、清良は言った。

「できない」

清良は小さく笑って、私をまなざしにとらえる。

「あたしは別に、死んでくれとか空飛んでくれとか言っていない。

無理難題であなたを困らせようっていうんじゃないの。本当にやつてもらいたくて言ってるの。

泣くって、そんなに難しいこと？ やってみたことある？ ない

んじゃない？」

「ない」

「なのいきなり『できない』って、冗談のつもり？ 面白くな

いわよ、笑っちゃったけど」

「できないのは、私がしたくないから」

「どうして」

「あなたが傷つくと思うから」

チャイムが鳴りだす。休みが終わってすぐに来る先生ではないので、まだ少しは時間がある。

「そういうのが気持ち悪いって言ってるの。やめろって言ってるの。」

もしかして、なにか勘違いしてない？ 脅しなんて嫌いだからあんまり言いたくないけど、まさか忘れたわけじゃないよね。二ワト

リじゃあるまいし」

「覚えてる」

「なら、あたしをイライラさせないほうがいいってわかってるんじゃない？ あたしの気が短かったら今ごろ公衆電話にダッシュしてるかもね」

「でも私に話しかけるのはやめないのね」

「…なにが言いたいのかしら？」

「あなたが現にしていること」

「説教はやめなさい」

「あなたのしていることを言っただけ」

「それを説教っていうの。あたしが訊いたのは、あなたのこと。自分のことなんか訊いてない」

私は少し考えた。

「…あなたと今みたいな話をするのが、あんまりいいことだとは思わない。でもなにも話さないよりはいいと思う。もし私の話を聞いてわかってくれたら、嬉しいし、いいことだと思う」

「いいことって何」

「…好きな人に押しつけないこと」

清良の頬が優しくゆるんだ。

「正直ね。可愛いわよ。」

あたしは押しつけられるのは嫌い。だからそういう押しつけはやめなさい」

「やめない」

しばらくのあいだ、清良は無表情に私を眺めていた。

「長谷部さんより大事だっていうこと、その押しつけが。」

じゃあ、もし」

もし、の続きはなかった。清良はそこで黙りこみ、少しして教室に先生が来るまで、口を開かなかった。

別れ際、

「明日の放課後はあけときなさい」

言って、返事も聞かずに清良は自分の席に戻っていった。